

## 第一回多聞の会

### お釈迦様のお知恵を拝借

早川 みなさんこんばんは。今夜は多田庄多聞の会ということで大勢集まっています。なかなか楽しい会になるのではないかと思っています。案内に書きましたようにこの会は勉強会ではありません。一応先生をお招きしてありますがその先生のお話しをネタに話をするというのが主旨です。で活発にやっていたらいいと思います。

今夜の先生である宮下さんにごつて来てもらったのが、それを紹介したいと思います。私の仏教の先生である橋本先生、橋本先生に教えてもらった維摩経のテープを起して作った本がこれですが、その橋本先生に誰かと勉強したいとお聞きしたところ、宮下さんのところに行けと言われたのが知り合いになったきっかけです。それは今から二十年ほど前のことで、そのとき一人で読んだのがこの持ってきた中論で、これは一人で読んでいると気が狂つような本なのですが、当時月に一回京都の大谷大学まで出かけて行って、十年かかって読みました。それが完了したのが今から十年ほど前のことなので、従つても二十年来のおつきあひになります。この会に来てもらえないかと頼んだところ、行くところ、どこか来ていただきました。

今口は、この話を録音して紙に書いて残したいと思っています。録音した内容についてはあとで発言された方の許可をえてから公表する形にしますので協力して下さい。なるべく多くの方から話を聞けるのを楽しみにしています。それでは宮下さん、お願いします。

宮下 ありがとうございます。早川さんと同じ類な話をしてしまいました。二十分ほどの話題提供

して欲しいと言いつたのですが、どんなことができるのかわかりませんが自分のやっているところをお話します。

僕は大谷大学で仏教を教えています。何か題を付けてと早川さんに頼んだところ、お釈迦さんのお知恵を拝借と付けていただいたのですが、僕の専門はインドの仏教の研究ですので、そのあたりから話したいと思います。

#### 菩薩苦行像

まずはこの写真、絵を知らん下さい。見られた方があるかも知れませんが、これは菩薩像、苦行する姿で、今のパキスタン、ガンダーラといつところで作られたものです。



紀元後一二三世紀のものと思われます。お釈迦さんは出家してから六年間修行したと言われています。二十九歳で出家して三十五歳で仏陀になった、成仏した。

その間とても厳しい苦行をされた。そのような苦行をなわて、その写真にあるような姿になった。

元々、仏陀像はインドにはなかった。紀元後一二世紀頃からそのような像が作られる。そのついで意味では最初の仏陀像です。この写真を見られて分かる



## お釈迦様の智慧

みななまが存じのちひい、お釈迦様がテーマにされたのは、老病死の苦しみに  
す。老ひの、病ひなるの、死ぬ、は、

今日のテーマもある。お釈迦様のお知恵を拝借「に」きます。智慧とありま  
すから、智慧とは「いた」何なのか。お釈迦様にしての智慧、一応そう考えま  
すと、お釈迦様の智慧は何のための智慧であったのか、何にその智慧を働かせて  
いたのか。その智慧は、老病死の苦しみを徹底的に見抜いて、その苦しみを超え  
て生きぬための智慧であったはず。そう考えます。

ただどわわれわれにも智慧がないわけでもない、われわれがわれわれの智慧を  
最大限に発揮したらどうなるのかについて、今日の時代社会を生み出す、一応  
そうしておきます。わたしたちの智慧が最大限に発揮されて今日の時代社会  
が築かわれてきたのだ。

そこで、お釈迦様の智慧とわたしたちの智慧とを区別してみようと思いま  
す。

お釈迦様の智慧は老病死の苦しみを徹底して見抜くための智慧、それは私  
達人間がどうしても見ぬなければならないものを見る智慧である。私達が普  
通に智慧を思いつくものは、自分の外に現れているもの、自分の外に立ち現れ  
てくるものを見る喜びのために見る智慧である。このように「応」智慧の区別がで  
きる。この「応」智慧の区別は今日われわれが築いてきた社会ではとても大事な  
もの、思わね。

今日、今日、お釈迦様の智慧を拝借「と」しますが、拝借する「と」してよ  
り、そのお釈迦様の智慧は「の」しなまののかを考へる「に」なる「思」

す。

そこで、お釈迦様の智慧とは何かあるかと「い」、それは悟りをひらかれた  
智慧で「い」われてしまふ。しかし、そう「い」われる「な」に「特」に「賢」い智慧  
であるか、あるいは昔からの仏教の「言」い「方」で「言」つ「て」、一切は「空」である「と」喝  
破する「よ」う「な」われわれ常人には「と」ても「お」よ「び」が「つ」かない「よ」う「な」、その「よ」う「な」特  
別の智慧、悟りの智慧だと「言」つて「ま」つ。それは決して間違「い」は「な」い「け」れ「ど」、  
そんな「ぶ」つ「に」「い」つ「と」きの智慧は、それは釈尊が仏陀になつた「と」つ「到」達した結  
果から見た時の智慧である。到達した「と」ら「か」ら「見」る「と」つ「言」える「か」も「知」れ「な  
い」が、その人だけに備つた特別の智慧だと「言」つて「ま」つ「と」、も「つ」その「あ」は「考  
え」よ「う」が「な」い「あ」の「人」に「特」別の智慧があつた「か」ら「あ」の「よ」う「に」な「つ」た「だ」う「見」て  
しまふ「に」な「ぬ」。

しかし、その「よ」う「に」話「を」終「わ」ら「せ」ず「に」、お釈迦様も一人の人間だ「と」して考  
える、われわれも一人の人間である「よ」う「に」、お釈迦様が問題にされた「と」は「何  
であ」つた「の」か、人間が人間である「と」踏「み」と「ま」る「と」つ「と」する「と」き「に」どう「し」て  
も「見」ぬ「る」を「得」ない「問」題「を」見「る」、その「よ」う「に」「い」つ「と」があ「つ」た「だ」う「思」ひ「ま」す。お釈迦様  
が問題にされた「と」は、智慧においては異なる「か」も「知」れ「な」い「が」、その問題は「お」釈  
迦様においてもわれわれにおいても同じ「と」ある「ま」つ「た」く「同」じ「問」題「で」あ「つ」た「と」い  
えます。

も「つ」つ「し」焦点を絞ると、問題を見「ぬ」る「心」、それは私達と釈尊とは大に異  
なると「は」思「ひ」ま「す」が「し」か「し」、問題「の」もの「は」「い」つ「と」同「じ」である。

われわれが釈尊なり仏教なりを「学」ぶ「と」つ「と」き、結果から「学」ぶ「と」つ「と」す  
る「の」で「な」く、お釈迦様が問題にされた「と」田「発」心「に」どう「し」つ「と」同「じ」課題「に」どう「し」つ「と」  
そ「の」が「わ」わ「れ」わ「れ」は「始」め「な」る「本」質「に」どう「し」つ「と」同「じ」課題「に」どう「し」つ「と」

ます。「」がまだが、今日の「」であるお釈迦様の智慧と「」をきえんとす  
の大前提です。

### 老病死の苦しみ

では、お釈迦様は「」で老病死の苦しみを見られたのか、「」からお釈  
迦様の智慧と「」が問題になつてくるわけです。われわれだつて老病死の苦  
しみと「」一応分かります。お釈迦様に「」も老病死の苦しみはあつた、そ  
れらを「」で受け止められたのか、それを今日はもう少し考えてみたい  
と思ひます。

それで、その老病死の苦しみをどのまじな心で見たか、「」その心の「」  
に「」なり入らずに、老病死の苦しみとして見たのか、「」はあまりにも  
当たり前すぎて、われわれは考えないやうに「」あるいは考えなく「」  
すが、それをもう少し踏み込んで、立ち止まって考えたとき、「」  
なのかと「」や「」。

「」をきえんとす、老病死は「」であるのかと「」する「」から始め  
るのですが、老病死は「」に「」あります。『参加者「問いかける」』

会場から「老病死は自分のなか「」」

自分の中「」ある「」は「」な「」

開場から「老病死は見えない「」」

老病死は見えないですか。

老人ホームにありますよ、そこには老も病も死もある。

老病死は見えない「」の「」は「」な「」かも知れないけれど、むしろ「

」に「」現れて「」ますか。身体ですわ、身体があるから老病死は「」  
います。身体のあるものには老病死がある。しま、だから人に老病死があるこ  
言われましたが、人以外にも身体を持つて「」るものは「」。鮎にも蟻にも  
身体があるから老病死はある。われわれはそれと同じ老病死をする身体を  
もつて生きて「」る「」は「」る。

だけど、不思議な「」ですが、お釈迦様は老病死の苦しみを問題にされた。  
老病死の苦しみは何なのだろうかと思つたとき、「」まあ直感的には、それは苦  
しみに「」ないとは分かるわけですが、もう少し「」と踏み込んで考えたとき  
に、「」老病死はあるけれど「」老い「」を苦しむ「」か、あるいは死  
の恐怖はある「」かと思つてみたとき、「」その「」は「」や「」考え「」  
い。

### 苦しみとは何か

それではわれわれが死の苦しみとか「」の苦しみとか「」るものは何なの  
かとあらためて考えてみる。人間も犬も魚も老病死する身体を持つて命を生か  
て「」る、これは「」仏教の「」言つて、「」それら人間や魚や犬、その「」ものを  
衆生、一切衆生と「」それは老病死する身体をもつて生きて「」るもの「」  
と「」。老い「」の苦しみ、それは僕は孤独なのかと思つて「」るのですが  
「」になつて「」それが「」の「」一番の苦しみ「」が「」思つて「」るす  
があるいは「」の苦しみ、それは仕事ができなくなる、創造的な「」が「」なくな  
なる、自分の無力さを知らされる。死「」のは「」その「」自分の人生の意味が断  
たれる、「」俺は今まで何をしてきたのかと「」、「」生きる「」の意味が「」タ  
ク問われる、生きる「」の意味を失つて「」苦しみと「」。

老病死の苦しみと一言で言ってしまう。その中身はすべてである。不安であるとか恐怖であるとかむなむなしいものである。これは人間の苦しみである。人間の苦しみはタータリに象徴的に老病死の苦しみと云うわけです。

問題は、その一つ孤独に苦しみむか、むなしさの中に生きていけなくなるのか、その一つ苦しみは魚や犬にはないのに人間には生じて起るものか。一つは老病死を苦しむのは、人間だけの苦しみ人間であるが故の苦しみ人間が人間として生きているとある苦しみと云う。

それを聞いて「おはなして起るものか、それはいつか起る」とは言えるのかそれを問うたのがお釈迦様ですね。お釈迦様の智慧は一つ一つを問う「よがどうぞの智慧だ」と云います。

さて僕は「この苦しみはいつかは消える」とは言える。今僕が一つ一つ話をすると皆様もそのうた言ひかされるだろう。一つ一つとは大きな問題だとも思われる。しかし、出家してそのうただけを問うて解けるのだろうか。考えたり問うたりしても老病死がなくなるわけではない。出家して一生懸命考えたからといってそれら老病死が消えるわけではない。お釈迦様は仏陀になられたからといって老病死が消えたのではない。八十歳になり病になり死んでいったのだから、老病死がなくなるのではない。

それでは何を問題にしたのだろうか。老病死の苦しみは説明すれば一応分かるのだけれど、それをどう考えたのだろうかと言いたい。それをお釈迦様の智慧あるは智慧と云うと分からなくなるかも知れないの。智慧と云うよりそれら苦しみを見る心、心なむで苦しみに向かわれたのだろうか。一つ一つで踏み込まずに一つ一つを言いたい。

#### 四門出遊

その一つから僕なんか釈尊の生涯を読んでみますと、普通の物語ではお釈迦様は老病死と云う問題を見られましたとある。四つの門のたてえですが、釈尊が若いころ、城の東の門から出た老人に出会った。あれは何なのだ。あれは老いが男を襲っています。あの男だけに老いは襲ってくるのか。いえそうではありません。どんな人にも老いはやってくる。と云う説明を聞いて、ああやがて自分も老いていくのだと深く憂いのつちに城に引き帰ってきた。その一つ物語になつてます。南の門から出たときには病人に会い、西の門から出たときは死者に会い、と云う物語ですね。深く憂いに沈む釈尊が、ことごとく北の門から出たとき、一人の出家者に会った。だから釈尊はその出家者のまじりに出家して老病死の問題を解いて出家して行かれたのだ。一つ一つに物語はなつていきます。

一つ一つとは実際あったわけではないのですが、釈尊はいつか何を問題にされたのであるかと考えていくときのまとめですね。問題を明らかにするための物語が作られています。

なかなか出家しない釈尊を描く物語もあります。

老人を見て私もあんなに老いていくのだなと憂い悩み、城に帰ってきた釈尊は王子様として描かれています。寝ないで五欲を楽しんだ、享樂するだけ享樂したと書いてある。つまり快樂の中に自分を投げ込む。で次は南の門から出て病人に会う。深く憂いと悩みを引きずりながら帰ってきてははやくするとまた快樂にふける釈尊を描いている。昼夜分かたず快樂にふけて書んだと。西の門から帰ってきたときにも、憂いがあるのかかわらず快樂にふけた。





加様のところだけは何かで象徴をさせていた。たとえば、車輪のマークが付いたり、菩提樹のマークが付いたりして、それでお釈迦様を表していた。人の姿では描かなかった。それが二世紀頃から仏像が作られ始める。そこには仏像は作ってもいいという何かが生まれたのでしょつね。それまでは仏陀は描けないのだ、というところがあったのでしょつね。

参加者 A 一では今、ミユメのよめか。

宮下 ミヨールにあります。インドからピキスタンに入ったすくの大きな都市です。ミヨールの博物館にあります。

参加者 A イスラム教徒は、よく破壊せずにおいたものですね。

宮下 本堂によく残ったと思います。たがいは顔が削られていきますか。

早川 それは宮下さんが自分で取ってきた写真だと思います。

宮下 自分で撮ってきたものです。

参加者 A 先生、行ってこられたのですか。

宮下 行ってききました。

参加者 A 誰でも撮らしてくれるのですか。

宮下 誰でも撮らしてくれるのですが、その仏陀像はすでにもうガラスケースの中に入っていた。ガラスケースに反射した蛍光灯の光やガラスの影響など、いろいろ補正した写真です。ミヨールにはこれだけなく、これに似たものが多いがたくさんあります。

参加者 B 安らかな顔でなくて苦しんでいる顔を作るというところは、見る人に何を訴えたかったのですか。だんだん穏やかな顔になってきたという話でしたが、わたしがこれまで見てきたのは、ふいとした穏やかな顔ばかりだったので、見た人に安らぎを写し与えるのだとしたら、穏やかな顔の方がいいと思うのですが、あ

るという苦しい表情だったというのはいったいどうなのですか。苦しんでいるというのを見せたいという意図で作ったのですか。

宮下 うん、まあだけど、その顔をよく見ると苦しんでいる顔ではありませんね。苦しんでいる顔ではありませんね。むしろん厳しけれど。だから、単にものが苦しんでいる表情ではない。何かをこころで見つめる、思索して、そんな顔ですね。何を集中的に思索しているのかを訴えかけるという顔。

参加者 B それが今みたいな穏やかな顔になってきたというの、おどろきで変わってきたのですか。

宮下 穏やかな顔というのは仏陀の完成体です、ミヨールは完成体を描くことではない。仏陀の完成体としては智慧とか慈悲とかですから、そのことそのものを表そうとするのが、穏やかな顔だと思います。場所によれば、蓮の花もあ、リ、チベットなんかは激しいですよ。

参加者 A お釈迦様が問題にされたこととはわかれにしても永遠に解けない謎ですね。私は病気もしてきました、いすれ最後は来るだろうと思いつつ、ミヨールはすべての人間が苦しんできたと思います。最後の回答はお釈迦様はなぜとされたのですか。

宮下 お釈迦様の見つけられたものではありません。苦しみの原因を言葉で残しておられる。渴愛といつのです。渴愛が消滅すれば苦しみは逃れることができる。ミヨールに言います。講義でも、また、ミヨールな場所でも時々あるのが、がもつても、年輩の人たちのいる公民館で、僕の講義を聞いた後に質問されるのです。先生の話の聞いたら、仏教は欲望を断ぜよと聞かされた。欲望のない人生はつまらないのではないですかといわれた。七十八のおじいさんが、さういっています。だけど、欲望を満たすということが、いっしょにあるが、よく「存じ



なのです。あえてそうしたいと思ってしまうわけではないけれど、欲望のない人生はつまらなくて思っています。そこには何か、一つ欲望によって何かを満たされるわけでもないけれど、苦しみの原因が欲望であるとき、欲望のない人生はつまらんと反応される。積尊がなかなか出家しなかったのと同じく似ている。そういう意味では、みなさんなかなか出家できません。ちょっと言い過ぎたかも知れませんが。

早川 全員出家したら世の中成り立たなくなるといつ話がありますね、それはどうなりますか。托鉢する人はかりだと何ももらえなくなり生きていけなくなる。たとえば、生産的などんな仕事もしなくなる(会場、笑)

宮下 そのうか。ただものすごい数の人が出家したのだと思います。社会が出家した人を大事にした。尊敬するのです。いまこの現代において誰かが、たとえば早川さんが出家したら。。。

早川 それはきつてバカだと思われる。

宮下 今(いま)の世(よ)に立(た)って、あつち(あつち)へ行(い)くといわれる。尊敬されるよつな社会でない。あの時代は何かを求めている人を尊敬し供養する。社会的な状況が、あつち(あつち)の世(よ)のものがつまらなくて思(おも)います。

参加者B 日本でお坊さんがあまり尊敬されていない。それに対して東南アジアのいくつかの国のお坊さんが尊敬されている。これは、われわれに原因があるのかお坊さん「原因があるのが、両方にある」といって恐ろしいかもしないか。

宮下 まあ、両方に原因があると思(おも)います。正(ただ)しい。

参加者B 昔は違(ちが)っていたか。

## 供養

宮下 室町まではそうではなかった。江戸からだんだん変わってくる。もう一原因があって「これはこの人が言っている」とではなく僕一人が考えている。この話半分聞いて欲しいのですが、いま供養といたしましたが、供養という問題がすごく大きい。供養するというのは、供養して自分のところに福德が積み重なっていく。供養するとは、どういう意味かという尊敬するということの意味です。尊いものに向かって尊敬する。そのためにはお花を捧げたりお香を焚いたり礼拝したり、なんでもいいのですが、そのことによって自分の人生の幸せがやってくるということです。

これは古代からずっと続いている一つの考え方です。東南アジアにはそのような文化がまだ残っている。それが大きいです。中国と日本は完全に壊滅している。まあ中国は別の意味で壊滅しましたが、中国は今復活しています。もう一つ、「勢いで復活しています」。日本は福德を積むのは銀行に積めばいいという発想がなくなっている。今は価値あるものは貨幣である。もう一つは、まあ完全に、お金だけが人生でないよと一応頭で考えてはいるが、しかし、現実的には貨幣の力は圧倒的です。よ、負けています。お坊さんを尊敬するよりお金を貯めた方が自分にとっていいからメリットがあると思(おも)っています。

そのう(そのう)の時代(じだい)の中(なか)に生(な)き起(た)って、坊主(ぼくし)もそれ(それ)にあわ(あ)せてしま(しま)った。坊主(ぼくし)の使命(しめい)も何もなくな(なくな)ってしま(しま)った。だから、お坊(おぼくし)さん(さん)の質問(しつもん)に答(こた)え、原因(げんいん)は両方(りやうほう)だと思(おも)います。

参加者B そのう(そのう)は、必ずしも、仏教(ぶつぎょう)の世界(せかい)だけでなく、イスラム(いすらむ)とあれキリス

ト教の世界であれ、そのメンバーは別として、あの程度はなにかのを得ないことではないか。

宮下 それはイムラムはちよつと別として、ドイツに行くところそれは如実ですね。キリスト教だから仏教みたい。供養とは言いませんが、教会に行く人が激減している。ドイツの人と話をしていると、完全に世俗化しているところ。ドイツも日本も同じような社会的状況をもっているのだなあと感じぬ。

とくろが逆にアメリカは宗教社会です。あわはひどいものです。ひどいところのは言い過ぎかも知れないが、アメリカでは宗教が必要と思う人のパーセンテージは抜群です。今のアメリカの政治を支えているのは宗教。

もらこも

早川 今の供養の話ですが、このあたりでは、お坊さんに供養する話ではなくて例えば、野菜をあげるとかあったりあるところ。そのついでにあげた方も嬉しい。たとえば、お魚を誰かからもらってあげたり、ついでに言つと、もらした方も嬉しい。あげたほうも嬉しい。供養のちよつと手前とつつか、供養の感情に近いものがいます。辺にはあるところ。しかし、これはあつたりだけのことでなくて、人にものをあげて言はれるとあげた方も嬉しい。これはもつちよつとで供養にまでいくのですが。

宮下 それは贈与ですが、贈与は未開民族の中でもある。それは社会生活の基礎で、何かをあげる。そのついでに何かが返ってくる。何かを返さなければならぬ……。

早川 その話はちよつと贈与のついでにあげたから必ず見返りを求めるところではないか。

返さなければいけないという気持ちで返すところ。そのあたりはちよつと贈与か。

参加者C よつともらいますが、僕らも、そのときはお礼して食べたります。同じつても喜んでくれる。あと、卵でもたくさん持ってきたら持つていつつかとつつかにもなる。それはしなければならぬとかでなく、もらしたとき僕は嬉しかったから持つていつつかつつかになる。自分でもせれる範圍でせぬとつつかいのですが。

早川 今言われたように、もらしたから必ず返さなければならぬという強制力はないと思う。出すときもないし、返す人にもそれはないように思う。贈与とは違つて思う。

参加者D 今の話ですが、今日ちよつと、朝起きたら無と白菜が玄関に置いてあつた。誰が持つてきてくれたのか分からない。日常のことです。うちにはよくつていただいていぬ。

宮下 そうなんです。参加者D 買い物から帰ってきたら白菜がもつと増えていた。会場、笑。前の人を持つてきてくれたの、また持つてきてくれた。白菜はなんでも料理ができるので、私なんかは欲ではないもの、仏さんの言つ布施でもなく、なんか自然にいただいて、ありがとつと。しかし、ありがとつと言つ人がいない。どなたかわからないので笑。僕は中村に住んでいぬので、持つてきてくれた人は中村の人に違ひないのですが。

僕はこの地に来て、非常に心豊かなことだと思つた。先ほど、先生が言われましたが、今は物質社会ですよ。私は大阪から名田庄に来てもらつたのですが、僕には大量生産、大量消費の社会についていけないと思つた。もちらんその中にはいるのですが、あつてそのあつた社会で先頭を切つていぬはあつた



ら、干し柿をあけたかを見返りに何かを返していかねばならなくて、食ってこれと。自分だけに閉じこめておくのは、自分の喜びだけでは不十分だと思う。人に喜んでもらえて初めて自分の喜びになる。そんな気がするのですが。自分で作って自分で食べているだけではつまみ食いもならない(会場 笑)。

参加者D 僕は楽しむ力、楽力というのを言っているのですが、その中に楽しみを分かちあう力というのをみんなが養いながら運動しているのですが、楽しみというのは一人でもあったら絶対おもしろくない。みんな楽しむ方が楽しむ方が絶対おもしろい。ところが物質社会というのを自分だけ貯めようとして自分だけよければいいのがどこかにあるように思う。我、我欲に対する執着というのが、今まで持たなかったような人まで執着している。自分の上で人を殺したり平気なものを盗んだり、その世の中だからいって、仏の教えのようになんがテレビで本でクローズアップされてくるように思います。

老い

参加者E 私の知っている人がちょっと痴呆がかかって施設に入っています。それはすごく大きな施設で、お年寄りには終日座ってテレビを見せられているらしいのです。かなりの高齢で痴呆も入っているからテレビの内容はほとんど分からない。分からないけれど一日ずっと座ってみている。先ほど先生がおっしゃったようにこのように年を取って来たんだな何もかもなくなると、昔どきどきは何かあったのだけね、例えば本も読む気がしない、テレビを見てもわからない、そんなときに、痴呆にはじめてそれっていいのかもこれだね、それってではなくて何もするものがなくなると、何を生き甲斐にしているのかなとおもったので、それなら自分の中に楽しみが見つけられないのが、

宮下 極端な言い方のように聞こえるかも知れませんが、老いたり病んだり、そして死ぬと、生きて生きて甲斐と思っていたことが、すべて終わるわけですね。そういう人たちはある種の極限状況にいるので、そのような話の時に僕はいつも出ているのは、マウンテンの収容所でのランクルの体験ですが、強制収容所ではよく奪われるわけです。放っておけば、収容所人間、人間でなくなってしまう。相手の囚人を押しつけて生きていくとする。そうなるか、つか、それにもかかわらず、人間として生きる意味を見つけてよとするか。ランクルはそういうことを自分に課して生きていた。全部奪われたとき、それでも生きる意味があるのか、そういう問題とよく似ています。

たとえば、意識ははっきりしているけれど病気でベッドから出られなくなった。何もできない。テレビもおもしろくない。外的なもので自分を意味づけられることができない。そういう人に生きる意味はあるのか、これは自分自身に問わなければならないのですが、それはただ特殊な人だけがそうなるのではない。僕らもそういうなるか分からず、そういうことを釈尊はいついかに受け止めていたのだらうと思う。この問題を解いた人がいた、そのことを信じていこうか、つまり、それでも生きていけるのだと、生きる意味を見つけていこうか、それが可能なのか、と、このことを信じているのですが。

早川 老病死を越えるとしたとき、越えるというのは、たとえば、棒高跳びで越えるのと同じように、老病死があつてそれを置いたまま、いかに行く。超えるのと同じのは、なにかな、うつな気がする。それは、わたくしに置いておくけれど、後ろを見ると残っているけれど、自分は越えた、そういうふうな思い。宮下 何となく分かるけれど、老病死はものでないから。いろんな言い方がありますが、消滅するんか。

参加者A 九十一歳でなくなった人なのですが、目が悪くなって白内障の手術をした。そして片方の目は効果がなく見えなくなり、身体は健康だけれども本が好きなのですが、すぐ涙が出て目が疲れる。それまで楽しみにしていたことができなくなった。そのときが苦しくて悲しかったのではないかと思います。自分もそんな日が近づいていて、本を讀んでいると目が疲れる。ああ困ったと思う。肉体は健康でも、そういつ自分の楽しみがなくなってしまうのが嫌な気がする。そういつ方面の欲望がなくなると、それは本当にいいと思う。

参加者D 徐々に老いしていく。徐々に死が来ると言いますが、うちのおふくろは自分の親父の法事に行き急死した。そのとき壮年会の宴会で飲んでいたけれど、とんで帰りました。きっと、本人は死ぬとは思っていなかったのではないが。写経が好きで、前の日まで写経をしていた。親戚一同が集まっていたと、トイトで行って倒れて死んだ。本人死んだと思っていないかも知れない。うちの嫁のお母さんも自宅で朝まで書いて倒れてそのままだった。二人とも、老いをじわじわ感じるようになって死んだ。死を意識せずに死ぬ人はどうなんだろうな。

うちのお袋が「くわして」ヶ月くわしたとき、不思議なことに夢を見た。私がある集まりにいて、そのとき電話がかかってきた。僕が「はい」と言っていて、「あなたですか」と。それがお袋なんです。僕が「お袋……」と言っていて、「お袋の……」と「お袋」と。あ、お袋と。会場、笑い。「元気にしているか」と。会場、笑い。そりゃよかったです電話を切ったのですが、目が覚めたとき、その夢はすごく強烈だった。あの世でも元気にしているのだからいいか。会場、笑い。

会場から、何人も「そりゃいい話や、いいわ。」

## 死ぬという

参加者D 死ぬというに対してゼロ消滅、滅びと聞いてなくてあの世に旅立つ。私が初めて宗教に接したのは親鸞ですが、彼は非常に現代的というか、クールな考えの人ですね。あの世とこの世は浄土教には出ますが、私は死ぬことをゼロあるいはマイナス悪いことととらえるのではなく、あつちで元気にしているのだからいいかと。この世にわが命を授けてくれた親が死んだときは衝撃的なことだし海乱もあつたけれど、その夢を見てから、あの世に対して不安や恐怖が薄れた。これは事実です。そう思ったらしい。生きまわっていることは楽しまなければと思った。無駄なことをせずに生きまわつてフアイトが出てきた。

宮下 僕の友人も若くて死んだ。そのとき彼の人生もなくなったなあと思いましたが、ただで彼は彼なりに本当に意味ある命を生きてきたのだと、どこか思うことができれば、どうしようもない悲しみはなくなる。どういつことが十分生きるようになるのか、自分自身で考え初めてそう思えるようになる。考え続けること、ああそうだったのかと納得することは並行的なことかも知れませんが、自分にとって大事なことをしたときも、自分自身の生き方の中であつて解消されていへ。

参加者B なくなった人を見ていて、弟のようです。なくなる過程を見ていて遺書のことで残された子供はやってけるだろうか、そんな相談をしていたのですが、で、いまになって思うと、私は相談にのつたつもりですが、どういつ気持ちで俺と相談してつたのだろうかと思う。その遺書を書いて私に対するのだけは見せてくれたのですが、父親は四年ほど前に晩酌して一時間ほどして「さー」と言っ気が失ったときは手遅れだった。





宮下 説教術といつのがキリスト教にはある。大学でもそのよつな実践神学をやめ。

今の日本の坊さんは生活の手段になつてしまふね。このお寺にお参りする人が本当に少なくなった。それは何を意味するのが。坊主も悪い話さなければならぬともあるのだ。みんな坊主を必要としていない。別の形で宗教が求められているのだとは思つていますが。だから、既存のお寺、仏教のところが行かない。たくさん本が出て宗教ブームでは言われている。どこかに宗教的要求はあるのだと思う。宗教的要求とは何なのだろうと、あまりきちつと考えないし、坊主も言わない。

お釈迦様の智慧を拝借していつて、何を、お釈迦様は考えられたのだらうかなどいつて、そこに戻らないと、宗教的要求とは何か分からなくなる。若者たちが要求を持つていても、それらを知った人がちゃんと提示しないと、「こゝに意味がありますよ」と聞くと、「そこはつて行つてしまふ。非常に怖い時代になつてしまふ。」

早川 あつね 台湾とか中国の海側、中は知らないのよ、そこに行くべし、いづれも毎日、日曜日だけでなく毎日、びっけりするのだけれど、いづれもお参りに来ている。長い線香をもつて拝んで。それを、いづれに旅行した日本の四十年代半ばの科学者が見て気持ち悪いと言つた、怖いと言つた。え、あんなことを毎日やつてゐるのが、怖いと反応する。多分それは日本人にとっては平均的な常識的な反応だと思つて。こゝをゆめゆめアンテナを置きます。若い人なら分からなうてもないけれど、四十年代半ばの人だつたのだ。

参加者B 仏様の名のもとに、キリスト教やイスラムにはありますが、どこかに攻めてついでついで歴史はあつたのですか。

宮下 それは幸いなことになつた。これからは分かりませんが。

参加者A 一向一揆の場合。

宮下 一向一揆の場合はそうですね。確かに、一向一揆の場合は戦つた。しかし、あれはどこかに布教に行くわけでもない、占領しに行くのでもない。

参加者B 私自身、マスで印象に残つてゐるのは、東南アジアで、焼身自殺する坊さんがいましたが、焼身自殺といつのはお坊さんであつて自分を壊す、外を壊すのでなくて、それは、優しいといえるかも知れない。さうも、早川さんが言われたアジアで見られる仏教のお参りののでは、なんの違和感もないむしろ、拝むついでなにか実際のなことを、幸せになりたいとか願つてゐるのではないかと。

宮下 どんな心でお参りに行つてゐるのか、まいわれたまつに幸せになりたいとか、家族が安全でありますよつとか、お金が欲しいとか、さういつてをお祈りしながら行つてゐる。その心をタイプライトに表す。僕ははつとなつてしまつたのが。

早川 お正月のお宮さん参りがつて。

参加者B 毎日お宮さん参りする人は少ない。

参加者D 仏教を正しく受け入れているかどうか、その歴史はよく分からないのですが、よその国の宗教は、よそのつたと、聖徳太子から始めて、道元、親鸞など、パターナリたちが正当派仏教を伝えている。一方で、何でも融合してしまつて、楽なといつかいかげんといつか、仏教を土着の宗教といつてしまつて、さういつて意味では戦わない、摩擦をなくしてやる。それは、宗教的な国民でないかとおもつてますよ。

宮下 だけれど、それは日本の特殊なあり方であつて、台湾でも道教と一体になつて、神様と仏様をいづれも奉つてついで、チンギスハンの神々とつてついで、





ないだけ。そのとき本当に悲しいのは何なのか。直らないというのが悲しいの。しかし苦しいのはおられるように、辛いというよりは言えないです。苦しいとおられるのは分かるけれど。

早川 そのように行けば直ると本当に思う。直らないと思ったら行かないと思つ。ひょっとしてあの人のように行けば、特別な力があつて直るのでないかと思つ。思い通りに期待をかける。それは全然ダメですよ。多分実際そうだと思うのだけど、そうはきり言いたときどきわくわくは残酷なのか、そうではないのが、その見極めが大事だと思う。

宮下 そのように行くのは一時的な慰めに過ぎない。一時的な慰みだけだと、ちよつと行ってみたら必ず帰ってくるかも知れないけれど。そんなふうに勧めるのがいいのが、直るはずはないのだとお互いに耐えて、踏みとまっていたり、直る可能性がある。ちよつとかたと思つけれど、しかし慰めはなかなかないですね。

参加者 G 直ると信じて死ぬのと絶望の淵にあつて死ぬのと、これは全然宗教にかかるといふのの、いふはなくて、きちんとした宗教で教えられて、そしてその病氣も受け入れて、安らかな気持ちで死ぬるので違いますね。

宮下 絶望と言つけれど、それは直らないから絶望なのではなくて、直りたいという心によって絶望なの。

参加者 G 先ほど早川さんが、老病死を乗り越えるのはおかしといわれたが、例えば、苦しみをおいたまま乗り越えるのはおかし。死とか病とかは自分がそれらを持って超えていく。いよいよ超えるのが本当に超えるところではないのかと思つました。

会場から) それは受け入れるというやね。

宮下 直らない難い病氣であっても明るく生きて死んでいった人もいる。だけど直した直したという想いで死んでいたら、それは絶望ですよ。そういふことで病氣に闘わっている限り、直らないけれど、この与えられた命を生きるのだと、そういうふうに変われば違ったものになると思つ。生きよつとする世界が違って見えてくると思つ。

参加者

H 受け止めたときに、違った世界になる。

宮下 そう、絶対直らない。それはどうも悲しいけれど。

参加者 H 悲しいと言われました。

宮下 その悲しみの中に耐えないと、直りたいという方に逃げていっています。

参加者 I 同じような病氣の方と会話をすることはできないですか。

会場から) ああ、同じ病氣の方同士が話すというのですね。それぞれ生き方が違うのだが。

参加者 I 東京には自己啓発セミナーなどがあり、そちらの方の本を読んでいた。その本の中に自助グループというものが紹介されていた。例えば、摂食障害なら摂食障害の人はかりが集まって、誰かが説教するとか、そういうのではなかった。ただ、それについて、そのことについて急に解決するのではないけれど、同じような人が集まって話していた。

参加者 B いまの話とまったく逆のことですが、私のおばさんが、もう十何年前ですが、同じ病、不治の病の人の集まりに行ったが、行かなければよかったと言つた。それはなぜかといつて、その集まりに来る人は皆死を受け入れていた。私は受け入れられない。そして、急激に落ち込んだ。彼女はそれを見て死を受け入れられる人と、そうでない人がいるのが分かった。受け入れている

人がいることで、自分は受け入れられないという苦しみが倍になつてかえつてきた。あとは身体の衰えだけが大きくなった。どこぞの別れ目があるのか分からないが、宗教の力があつたのかなとも思った。

宮下 受け入れたからすぐに安らかなになるというのでもないとはいいますけれど。

参加者B 受け入れられる人を見るのがつらかった。

### 新興宗教

参加者E 新興宗教というのは取り付きやすいんですね。別にその方が正しいとでなくて。例えば、悩んだ場合、仏教に行くより新興宗教の方が誘いはすくくあるし、聴いてももらえるし、テクニクがつまみと思う。わかりやすく、身近なところで解答をくれる。仏教というところだと勉強しないとわからないので、それは違うのですよというところをもっと広報してもらわないと(会場、笑)。

参加者D 既存の仏教はとても簡単な教えなのですよ。お念仏だけでいいよ。なぜそんな熱心かというところ、結果が自分たちのお金になるからで、新興宗教は常に団体ですよ。一団体としてきますわ。仏教は団体ではない。僕なんかは歎異抄を何回も何回もわけが分からず読んで何十年もつきまわして、いまでも分からな

早川 治部さんが言われたことですが、新興宗教だと行くところがかつていて、どうして、例えば大理教の教会なら小浜のところにあるとか。ところが仏教だと行くところが分からないというところに行けばいいの。お寺に行く場合でも、あそこだけに行きたくないか(会場、笑)。

問題はそういうのです。あの問題なところのお寺で大丈夫、これならあそこに行

くと、そこについてのが全くない。お寺の方に力がないからだと思っています。行くところが分かればそこに行くと思う。行く前に勉強しないと行けないと思うのでは困るわね(会場、笑)。教えるつもりに行くのに、おまえ勉強してきたかと言われても困る。お寺の責任だと思う。

宮下 かわれるとおもうです。

参加者E 昔はわりと人はお寺に行っていたんだ話を聞いたと思う。

宮下 しかし、今行かないのは行かない人たちのせいでもあるわけでしょう。他に楽しいことがいろいろあるから、行く必要はない。映画館に行った方がいい。

参加者E 話す方もそうですよ。誰も聴かない。

参加者D おもしろくないから行かないのでなく、苦しみを持った人がはげ口を求めて、切実な想いを持ってお寺に行っても門戸が開かれていない。それが問題。(会場から)行くところが見つからない。

参加者H その方もどこかに頼りたいのだけれど、私には先祖様はない。先祖様を拝みたくてもお仏壇はない。何に頼りたいのか私は分からないと言われる。さよってどこから何かにすがりたいと言われる。

参加者B 新興宗教に行く人を止めるところのは、行かない方がいいよと止めるのは、罪になるのですかね。

参加者H たとえば、ある新興宗教に入ると拜みに行かなければならない熱心。それをしないとおめなは修行が足りないとだからよくならないのだと言われる。よくならないのはあなたのためだと言われる。そんなふうに言われられたら、もつていっていいの。私は言ったのですが。

参加者C 私は信じていることがあつて、それは朝はお日様を拜んで、夜はお月様を拜んで、昼は大地にしがりと足をつけて、朝は冬日一日、あじがいてい

います、夜は寝るともきき今日一日ありがとうございました。さきの新興宗教のことは分からないでもないが、自分一人を病氣と闘っているところでも煮詰まったようなところになるのだから誰かといひしよにこの病氣に向かってくといふ、直るまで自分の身体が持つかどうか分からないけれども、いしよにがんばってくれる人もいしよといふような感じの気持ちを持たせたら、よそに行かなくても、そこにいきたいといふのは分からないといひなければ、そこにいけないながらいて、そこを直して帰ると思つても知れないけれど、多分よくはならないだろう。

早川 話は好きなのですが、いぢおつ時になりました。この会はこれで終わるわけなのですが、今日は「終」としていただきます。できたら二月か三月もきにやりたいと思つています。ありがとうございます。最後に宮下さんから一言。

宮下 一人にならぬ話を聞いて頂いて発題の甲斐がありました。私の発題を超えてみなさまそれぞれお持ちの問題を語りあわれたと感じ、私がかえって頂いた気持ちです。ありがとうございます。

資料

一 講師

宮下晴輝 天谷入文学文学部教授

二 日時、場所

平成十七年十二月十日 名田庄村山村開発センター

三 参加者（五十音順）

司会 早川博信

柴田健一（名田庄村小倉畑）、柴田初美（同）、治部ひろみ（同）、田歌昇（同）  
村中（坪内彰）坂井郡春江町、早川真理子（名田庄村三重）、早川智子（同）、  
萩原茂男（同村中）、藤原義信（同）、宮本健作（同村納田終）、宮本美希恵（同）

四 『仏本行集経（ぶつほんぎょうじゅうぎょう）』の一部より引用

菩薩、斯の如く食飲を減少し、精勤苦行して  
 身、皮膚の皆悉く皺（しわ）報（しわ）みてあかくなること、譬（たと）えば  
 苦瓠（くこ）にがつりの如し。未だ好く成（な）熟（じやく）せざるに、其の蒂（た）（た）を  
 割断（きり）はなすして日中（にっちゆう）に置（お）けば、炙（あぶ）られて萎黄（いおう）（し）はみきは  
 むしく、其の色（いろ）すでに熟（じやく）するも、肌（は）は枯れ皮（かわ）は皺（しわ）み、片片（ぺんぺん）  
 おのずか（は）なれて（た）らぬこと  
 自ら離（は）れて枯頭骨（ことうこつ）（く）ちぢぢびびたすが、いしよの如し。是の如  
 く是の如く、菩薩の體（たい）も猶（なほ）是と異なるなし。菩薩、すでに  
 食（じき）を進（すす）むる少（すく）なきを以（も）つての故（ゆえ）に、其の両（りやう）眼（がん）の睛（せい）（ひと）み、  
 深遠（しんえん）に陥（けん）入（にゅう）（おち）いるして、猶（なほ）井底（せいぞこ）（井戸の底）の水（みづ）に  
 星（しょうせい）宿（しゆく）（ほ）を望（もつ）見（けん）（は）るかにみるすが如く、是の如く是の如く

ぼさつりょうげん これみ わづ あら またまた かく  
菩薩の両眼も之を觀るに纒かに現わるると、亦復、是の  
こと またまた ぼさつ しょうじき もって ゆえに りょう  
如し。又復、菩薩、少食なるを以ての故に、其の両  
きょうろく  
脅 肋(わきあばら)、離離相遠かり、唯だ皮裏かわでつむ有るのみ。  
たと ござゃ あるい また ようじゃ た ひか  
譬えは牛舎、或は復、羊舎の上に椽木(たるぎ)を著けたるがこ  
とじ。

ㄨㄉ

参加者A・田歌昇

参加者B・坪内彰

参加者C・宮本健作

参加者D・萩原茂男

参加者E・治部ひろみ

参加者F・柴田初美

参加者G・藤原義信

参加者H・早川真理子

参加者I・宮本美希恵